

論文内容の要旨

申請者 藤澤 和歌子

論文題目

レシピエントとともに暮らす腎移植ドナーの経験

Experiences of Kidney Transplant Donors Living With Their Recipients

I. 研究の背景

臓器移植は、諸外国においては脳死移植が主流であるが、日本ではその約9割が生体臓器移植である。近年の技術の進歩により適用範囲が非血縁者間や高齢者に拡大されており、生体腎移植においては症例数が増加するとともに、従来の親子間での移植よりも配偶者間での移植が上回っている。これまで生体腎移植に関しては母から子など親子間での移植を扱った研究が多く、近年増加している高齢の配偶者間での移植などを含めた実態は明らかになっていない。ドナーに関しても健康的な者が選ばれるため、術前の意思決定を除き、術後に関しては身体面のみに関心が寄せられてきた（日本臨床腎移植学会・日本移植学会，2021）。先行研究では、術前のドナーの意思決定における自発性は様々であること（Yi, 2003）、術後はドナーがレシピエントの体調に影響を受けながら腎提供の意味を見い出そうとしていることが明らかになっており（Takada, 2017）、これらのドナーの経験は、レシピエントとの関係や術後の経過により異なることが示唆されている。特にレシピエントとともに暮らすドナーはこれまでレシピエントの闘病を支えてきた者が多く、そのことが腎提供の動機となったり、移植後の生活への期待を高めたりする可能性があるが、ドナーがレシピエントと暮らす生活の中で、どのように腎提供を決心し、手術を経て、自らの経験を意味づけているかは十分に明らかにされていない。本研究を通じてレシピエントとともに暮らすドナーに焦点を当てて腎提供の経験を明らかにすることは、ドナーの手術前から退院後の生活を見据えた看護支援を見出すことに役立つと考えた。

II. 研究目的

生体腎移植ドナーにとっての腎提供の経験を、レシピエントとともに暮らすドナーに焦点を当てて明らかにすることである。

III. 研究方法

質的記述的デザイン。主たる研究参加者は、都市近郊の500床超の1病院で、レシピエントと同一世帯を営むか、別世帯の場合も住居が近くレシピエントと往来のある生体腎移植ドナー8名である。データ収集期間は2018年5月から2022年7月の間である。各研究

参加者に対してドナー手術の術前から術後 6 か月の間に、参加観察とインフォーマル・インタビューを平均 1.3 回、フォーマル・インタビューを平均 2.6 回実施した。データ分析はドナーにとっての腎提供の経験に焦点を当てて解釈し、研究参加者ごとにテーマ化を行った。研究プロセス全般においてスーパービジョンを受け、妥当性、信頼性の確保に努めた。日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会（承認番号 2020-058）および研究施設の倫理審査委員会（承認番号 265）の承認を得て実施した。以下、研究参加者のプライバシーの保護のため仮名にするなどの配慮を行った。

IV. 結果

1. 食事づくりの大変さと老後の暮らしを考えドナーになったが、期待したのと違う結果に戸惑う；桜井さん

桜井さん 60 歳代女性、主婦。パートで働きながらレシピエントである建築業の夫を支えてきた。聞き上手の夫は自分にはなくてはならない存在であり、腎不全の食事管理は自分には「とても無理」であること、老後を考えると 2 人でできるだけ長く働きたいと考え、自分からドナーになると申し出た。移植後は自分もまだ回復途上なのに、夫が退院してきて食事管理をしなければならなかったことが「一番きつかった」。その後も期待に反して、夫は体調が優れず、食事管理が必要で、ときどき入院した。桜井さんは移植腎がいつまでもつかを不安に思い、「あと 10 年もってくれば諦めもつく」と語っていた。

2. ドナーになるために乗り越えたたくさんの困難を思いながら、手に入れた夫の健康と生活の自由を喜び、義母の介護施設への入所を決め、夫の認知症を心配する；春名さん

春名さん 60 歳代女性、病院職員。当初は移植をしたくなかったが、レシピエントである夫が希望したため、しなかった場合の夫の大変さをそばで見続けるつらさを思い、ドナーになった。その後も、自身に病気が見つかり手術をし、夫も追加の治療が必要になるなどして、移植までに 2 年を要した。その間、夫は腹膜透析も導入した。春名さんにとって「夫に振り回された 2 年間」だったが、移植後は順調で、仕事に復帰でき、夫の健康や生活の自由を実感できた。春名さんは夫妻で移植したことを理由に、義母の介護施設への入所を決めた。そしてこの間に仕事をやめた夫が認知症にならないかを心配していた。

3. いよいよとなってドナーになると決め、受けた手術からの回復が遅れ、気分が落ち込むが、家族の気づかいを知って手に入れた健康と自由を大切にしようと思う；月原さん

月原さん 60 歳代女性、学校職員。レシピエントである夫は糖尿病性腎症で早期退職をしており、月原さんは自身の生活の乱れによるものなので仕方ないと受け止めていたが、

夫が腹膜透析に加えて血液透析を必要とするようになり、「死んでしまっただけで困る」と思い、友人から後押しを得て、ドナーになることにした。術後は思ったよりも回復に時間がかかり、仕事復帰への焦りと責任感から、気分の落ち込みを経験した。しかしこの間、夫から「本当に申し訳ないね」など、月原さんを気づかう言葉があり、手に入れた家族の健康と自由な生活を大切にしていこうと考えていた。

4. 術前に痛みが心配でナイーブになるが、術後は自分のペースで回復し、妻の仕事への取り組みや周囲からの支援を思っ腎提供の意味を確認する；松田さん

松田さん 40 歳代男性、整備工。レシピエントである IgA 腎症の妻に「40 代で透析はかわいそう」とその場で腎提供を申し出た。その後、友人から術後の痛みがとても強いと聞き、術前に「少しナイーブになった」。多趣味な松田さんは、移植後の休職期間にやりたいことをするつもりだったが痛みがぶり返し、元気そうな妻を見ながら、自分のペースで回復した。福祉職の妻は仕事熱心で、今回も職場から千羽鶴や寄せ書きが届けられた。松田さんはそのことに感謝し、誇りに思う一方、移植腎がいつまでもつかを心配していた。

5. 透析がなくなればと思っドナーになり、想定していた以上の痛みを耐えたが、妻に基礎疾患があるために移植による生活改善の実感がなく、釈然としない；石川さん

石川さん 70 歳代男性、退職後パート。レシピエントである妻は糖尿病性腎症と閉塞性動脈硬化症により介助が必要な状態で、1 年前に導入された血液透析により介護の負担が増加していた。石川さんは妻が透析をしなくてすめばと思ひ、「自分は楽観的だから」とドナーになった。術後は想定以上の痛みと排泄時の困難があつたが、仕事をしている長女に負担をかけないよう妻の面会に行った。術後、妻は透析がなくなり、介護も少し楽になったが、食事管理が必要で、新たな下肢浮腫が出現し、生活の改善は実感しづらかつた。

6. 事前相談なしに医療者から移植の説明を聞かされたことに納得できず、失った腎臓に喪失感をもち、自分にとっての腎提供の意味を見出せないでいる；青山さん

青山さん 60 歳代男性、退職後無職。以前からレシピエントである妻との関係はよくなかつた。妻は腎硬化症で、夫妻はこの先腹膜透析を導入するつもりで準備を進めていたが、青山さんは受診に付き添った場で突然、医療者から移植について説明を聞かされ、妻から事前相談がなかつたことに納得できないまま同意した。術後、青山さんは腎臓を失ったことに喪失感を抱いた。また回復が遅れている妻に食事をつくって支えても会話はほとんどなく、夫婦関係に何の深まりも見られないことに腎提供の意味が見出せなかつた。ドナーへの社会的支援がないのは問題であり、伝えてほしいと語っていた。

7. 年齢的にぎりぎりで提供した腎臓によって自由な生活を送る娘の姿を喜びながら、思いがけず認知症が進行してしまった夫の介護に戸惑う；森本さん

森本さん 70 歳代後半女性、主婦。レシピエントである 50 歳代の IgA 腎症の長女は学校職員だったが、腹膜透析と血液透析をしながら仕事を続けるのは難しく、1 年ほど前に辞めた。森本さんは長い間、食事管理をして長女を支え、近年では病気で認知症の夫の介護もしていたが、今回、80 歳を目前にして血液型不適合でも移植ができると知って、「ぎりぎり間に合った」とドナーになった。術後、合併症のため 2 か月間入院していた長女を、夫の介護の合間を縫って面会に行った。6 か月後、自由な生活を楽しむ長女をうれしく眺めながらも、この間、認知症が進行してしまった夫の介護に戸惑っていた。

8. 周囲からの理解が得られにくい中、自身のリスクを引き受けてドナーになり、術後に一時的に不安定になるが、移植後の母の姿をみてよかったと思う；南さん

南さん 30 歳代後半の独身女性、会社員。レシピエントである腎がんの母親は 70 歳代後半で、子から高齢の母親への臓器提供が理解されず、複数の病院に断られ、研究協力施設にたどり着いた。移植には自らの将来の妊娠のリスクが伴うと知って迷ったが、母親への愛情が強く、移植しなかった場合の後悔を考えて決心した。術後はあまりに痛みが強く、このような痛みを母親に与えたこと、母親が後悔しているのではないかと精神的に揺らいだが、ノン・ドナーの姉からの支援を受けながら回復した。その後、母親が普通の生活を送る様子を見て、南さんは移植をしてよかったと感じていた。

V. 考察

レシピエントとともに暮らすドナーには、自身が腎提供をしなかった場合にレシピエントの苦しむ姿をそばで見続けるつらさ、透析や食事管理など制限の多い生活をともにするストレス、加えて高齢である場合には老後の負担を減らしておきたいという思いがあり、腎提供をしないという選択は難しいことが明らかになった。そのうえでドナーは自身にとってレシピエントの存在、レシピエントとの関係、移植までに乗り越えた困難に基づき、腎提供に意味を見出し、期待をもって手術に臨んでおり、結果、移植により得られた家族の健康と自由な生活を大切にしようと思う者もいれば、腎臓を失ったことに喪失感を抱き、意味を見出せない者もいた。それには術後の自身やレシピエントの体調、腎提供をした自分自身へのレシピエントや他の家族からの気遣いが影響すると考えられた。移植腎がいつまでもつかという不安を訴える者は多く、移植による解決は一時的であることもふまえて、術前から術後にかけてドナーへの継続的な支援体制をつくる必要性が示唆された。